## 歴史を見るまなざし
## ―「生活」史の視点から―

| | |
|---|---|
| 奨励 | 西村 卓〔にしむら・たかし〕 |
| 奨励者紹介 | 同志社大学副学長<br>同志社大学学生支援機構長<br>同志社大学経済学部教授 |
| 研究テーマ | 京都における職人ネットワークの形成 |

兄弟たち、あなたがたは、自由を得るために召し出されたのです。ただ、この自由を、肉に罪を犯させる機会とせずに、愛によって互いに仕えなさい。律法全体は、「隣人を自分のように愛しなさい」という一句によって全うされるからです。だが、互いにかみ合い、共食いしているのなら、互いに滅ぼされないように注意しなさい。

（ガラテヤの信徒への手紙　５章13―15節）

### 歴史の中の
### その日・その年

１９４５年８月15日は何の日でしょうか。この日は一般的には終戦記念日とされています。その根拠としては、昭和天皇の肉声による「大東亜戦争終結ノ詔書」の録音が同日正午にラジオ放送された日だからです。しかし、その「詔書」は、前日の８月14日に発布されているのですから、こちらを終戦記念日としたほうが合理性がある気もします。

それでは、１９４５年８月18日から21日にかけて何があったのかご存じですか。このときにソ連軍は、北千島の占守島（しゅむしゅとう）に侵攻しました。ソ連にとっては、戦争は継続されていたのです。ソ連にとっての終戦は、ポツダム宣言受諾の降伏文書がミズーリ号の甲板で調印された日、１９４５年９月２日なのです。

また、１９４５年６月23日は何の日でしょうか。現在の沖縄県では、慰霊の日であり、休日となっています。実はこの日に陸軍中将沖縄第32軍司令官の牛島満（うしじまみつる）が自決をし、組織的戦闘が終了したとされる日です。このように、「終戦」一つをとっても、国や地域、そこに住む人びとによって、ことほど左様に多様なのです。教科書の年表に書かれているようなわけではないのです。

それでは、１９７５年という年はどのような年でしょうか。

この年は、連日、新聞やテレビでベトナム戦争に関する報道がなされており、私の心にも強く焼きついています。たとえば、年表（『近代日本総合年表』、岩波書店）を繰ると、同年４月30日の記事として次のように記述されています。

「南ベトナム、停戦交渉に失敗したミン政権、無条件降伏。解放戦線軍、サイゴンへ無血入城。五月三日、サイゴン放送、南北ベトナムの境界線を解放と報道」

あの大国・アメリカの、当時の世界戦略の一つが破綻した象徴的な年でした。

しかし、そのこと以上に、私にとってこの年は、数カ月の入院を経て父が命を閉じた忘れられない年でありました。そのころ私は、病床の父の付き添い介護に追われ、自分の身の振り方も定まらない状況でした。そんなとき、「教師にでもなろうか」と言った私に対して父は、「なるなら、大学の教師になれ」とアドバイスしてくれました。その言葉が遺言となり、その後の私の生き方を決める一言となりました。私の歴史であり、父の歴史でありました。

### 木村礎と生活史の視点

われわれは、歴史を学び、歴史をたどるとき、年表に書き連ねられた一般的な事実・事項を一つの基準として、各地域の歴史を判断し、その地域に住む各家族や各個人の歴史を判断することに慣らされています。これは、いわば、国家やその制度、またその政策がたどった歴史的経過から、地域や家族、個人を判断する方法、すなわち、上から下を見通すという、われわれが慣らされた歴史の見方、歴史の方法です。その方法は、地域の特性や、家族、個人のたどった豊かな歴史の流れを、一般的な歴史の流れのなかに解消してしまうことになるのです。

日本の地方史研究者としてつとに有名であった木村礎（きむらもとい）（１９２４―２００４年11月27日）先生は、２０００年６月に刊行された著書『村の生活史　史料が語るふつうの人びと』（雄山閣出版）のなかで、次のように語っています。

「（生活史とは）ふつうの人々の日常性を中心にして歴史をみる。歴史というものを万能の神のように上から俯瞰的に展望しない、ということです。上からではなく下から見るのです」（同書24頁）。
「生活史は、権力問題を含みます。それは権力からみたふつうの人々ではなく、逆にふつうの人々の暮らしから権力をみる。つまり視座を逆転させてみるということです」（同書22頁）。

まことしやかに天下国家を語ることが歴史学の常道であったことに対して、それを逆転させることのなかに、歴史のリアリティがあると先生は言うわけです。

生活史では、史実を一般史や国家史、制度史から読み解くのではなく、生活する人びとの生の史料から、具体的にその生活の姿を再現し、それを基礎に、国家や政治や制度を逆に読み解く。すなわち、上からでなく、下から歴史を見通すのです。

さらに、生活する個人や家族、そして地域の側から、国家を捉える。いわば、国益や公益などに解消されるべきでない、個人や家族や、その人たちが、いやわれわれが住む地域での生活の側から、国家や国策の不条理を照らし出す、そこにこそ、生活史の醍醐味と意義があるわけです。

そうするなら、最初に述べた天下国家史の時代区分ではない、普通に生活する人びとや地域ならではの時代区分があるでしょうし、生活の質があるはずです。それを丹念に読み解くことで、その地域の一つひとつが大切であり、そこで生活する人びと、われわれ一人ひとりの大切さが、初めて認識できるのです。

### ある「家計日誌」から

最近、演習の学生たちがフィールドワークのなかで発見した、京都の一豆腐行商人が残した「日誌」を読む機会がありました。昭和13（１９３８）年、当時使われた「紀元」でいえば「神武天皇即位紀元二五九八年」の「家計日誌」です。

日常の行商の様子や家族のこと、町内や学区のこと、年中行事のことなどに交りながら、個人が、家族が、日本が、戦争に巻き込まれていく様子が読み取れる記事に出会います。

三月一日（火曜）
五時起床、晴、晴、晴
東南の風、温、六十度（華氏）
泰三より葉書来る、無事
（泰三というのは、「日誌」筆者の弟です）

三月二十六日（土曜）
五時半起床す
東南の風弱
晴、晴、晴
六十四度
西村和三郎氏方森田哲三君召集令来る
和一郎より慰問品の礼状、東魚屋町一同様へ来る
（和一郎も筆者の弟です）

四月十日（日曜）
五時起床す
北西の風、晴れ、六十八度
・・・・・
東魚屋町御千度北野神社へ参詣、皇軍武運長久祈願す

今日は日曜日なり、花どきなので、各町の御千度催しあり、
方々人出多く、賑ぎやかなことであった・・・・・

七月七日（木曜）
四時三十分起床
曇り後ち晴れた
八十六度。初夏らしくなった
今夏はしめてきぬこしを造る
東魚屋町下御霊神社参拝、
御百度皇軍将兵武運長久祈願並戦ぽつ将兵の英霊に目礼、
後ち町内出征勇士の宅慰問、慰問品砂糖一箱
滋野学区各団体の慰問ありたり
泰三より無事の便りありたり

先ほどの『近代日本総合年表』を見ると、昭和６（１９３１）年９月18日に満州事変勃発、昭和８（１９３３）年３月27日に国際連盟脱退の詔書、昭和12（１９３７）年12月13日に南京占領、昭和13（１９３８）年の４月１日には、国家総動員法が公布されています。同年10月27日には武漢が日本軍により占領されるという、この「日誌」の綴られた昭和13（１９３８）年という年は、文字通り「日中戦争」の真っ只中でした。

この「日誌」から読み取れる内容には、一般の国家史や制度史では描かれない、生活する人びとのリアリティがあります。家族の無事を祈る切ないまでの思いがある一方で、戦意を鼓舞する「世間」の流れのなかで、戦勝祈願にも出向いています。しかし、やはり家族の無事こそが、第一の願いであり、平和で家族が無事に暮らせることこそが幸せなのです。

「家族の無事」を心底願うからこそ、上からのナショナリズムの鼓舞への対抗になり得るのです。「家族の無事」を祈ること、そして家族への慈しみ、かけがえのない命を惜しむ心持ちのなかにこそ、反戦、非戦の根拠があるのです。

私は「国益」などという言葉にごまかされません。「死にたくない」「死なせたくない」という父や母の思い、そして、平和に生きたい＝平和こそ幸せだ、という人びとに寄り添いたいのです。

これが私の歴史観であり、いまこの逼塞（ひっそく）し、「国益」というまことしやかな美辞麗句が声高に叫ばれる時代にこそ、一人の生きる人間として、取るべき、いや取らなければならない「態度」だと確信しています。

２０１２年10月30日　同志社スピリット・ウィーク秋学期
今出川火曜チャペル・アワー「奨励」記録